

男の風姿

—王衍・鎌足・鳩那羅太子—

岩崎雅彦

世阿弥能楽論における重要語の一つに「風姿」がある。以前、この言葉の用例について考察したことがある(小町の風姿—『玉造小町子壮衰書』と世阿弥能楽論—『鏡仙』二一八号。平成十四年六月)。世阿弥は「貴人の女体、気高き風姿」(『三道』)、「みやびたる女姿に、花を散らし、色香をほどこす見風、是又なによりも面白き風姿なり」(『拾玉得花』)など、物まねの対象としての女の姿に「風姿」の語を用いている。前稿では美女の姿に「風姿」の語を使った例が平安時代の『玉造小町子壮衰書』にあることを指摘した。男の役柄に使われた例としては、『三道』に「軍体の風姿」という表現がある。今回は男の「風姿」の用例について見て行きたい。

人の姿を意味する「風姿」に似た言葉としては「風体」「風貌」「風采」「容姿」などがあり、これらは今日でも普通に使われる。これ以外にも「風儀」「風容」「風尚」「風望」などの語がある。

男の「風姿」の用例は、古く中国の歴史書に見える。『大漢和辞典』には、『晋書』王衍伝の次の例を挙げる。

王衍、字夷甫、神情明秀、風姿詳雅。

歴史書の紀伝部では人物の性質や容姿を称えて簡潔に記すのが一つの定型となっており、「風姿○○」などの記述が見られる。王衍(二五六〜三二一)は西晋の武將で、竹林の七賢の一人、王戎の従弟に当たる。同じく七賢の一人、山濤は少年時代の王衍の資質を見抜いたという(『蒙求』七十五)。

同じく『大漢和辞典』が引く『宋書』明帝紀の用例では、宋の明帝(四三九〜四七二)について、

帝少而和令、風姿端雅。

と記す。また『魏書』李孝伯伝には、

孝伯、風容閑雅。

という表現も見られる。

こうした人物評の記述の型は、日本の歴史書にも取り入れられた。藤原鎌足の伝記を記

した『家伝』(七六〇年頃成立。『群書類従』第五所収)に用例があることが『日本国語大辞典』に指摘されている。

大臣性仁孝、聰明叡哲、玄鑒深遠、幼年好学、博涉書伝、每誦太公六韜、未嘗不反覆誦之。為人偉雅、風姿特秀。

鎌足は幼い時から聡明で学問を好み、太公望の兵法書『六韜』など多くの書物を読んだ。人となりは気高く、容姿は特に優れていたという。中大兄皇子に協力して大化の改新の偉業を成し遂げ藤原氏の祖となった鎌足は、早くから神格化され、信仰の対象として多武峰の談山神社に祀られた。

鎌足は文学作品にも登場する。室町時代に盛行した語り物で、本の形でも広く読まれた幸若舞の演目の一つに「入鹿」がある。この作品では鎌足の誕生から蘇我入鹿を退治するまでが描かれる。それによると鎌足は父の中臣御食子の流罪先である常陸国で生まれ、幼い時に狐が鎌を口にくわえ枕上に置いて行ったという。十六歳の時に庭の夫として橘の京に上るが、役人が鎌足を見て、その相貌に目を留める。

「多くの仕丁夫の中に、いとけなき童あり。形はやつれ果てたれど、ただ人ならず覚えたり。金骨の相のあり。金骨の相とは、大臣の相の事なり。田舎へ今は下すまじ。宮内にとどまりて、御門を守護し申せ」とて文章生に任せられ、右京の大夫に経あがりて、宮内の交はり、はや

雲客になり給ふ、果報のほどのゆゆしきよ。
（新日本古典文学大系『舞の本』）
役人は鎌足に将来大臣になる金骨の相があると見抜き、文章生に取り立てる。

容姿の良さが重要であることは、大和猿樂の祖とされる秦河勝の伝承にも見られる。世阿弥の『風姿花伝』第四「神儀」に、欽明天皇の御宇、大和国の泊瀬川が洪水の折、川上から一つの壺が流れ下り、三輪の杉の鳥居のほとりて雲客がこの壺を取ったと記す。

中にもどり子あり。貌柔和にして、玉の如し。これ降り人なるが故に、内裏に奏聞す。

その夜、帝の夢にみどり子が現れ、自分は秦の始皇の再誕であると告げる。帝は奇特に思い殿上に召す。子は才智に優れ、十五歳で大臣となり、秦の姓を下され、秦河勝と名乗る。これらはもとより史実ではなく、あくまで伝承であるが、古代においては容貌が優れていることが大臣の資質として重要であったことが、これらの記述から窺える。

話を歴史書に戻すと、六国史の六番目に当たり、清和・陽成・光孝天皇の時代について記す『日本三代実録』（『新訂増補国史大系』第四）に、中国の歴史書の記述法に倣った表現が多く見られる。清和天皇については、
風儀甚美、端嚴如神。

と記し、美しさは神のごとくであったと称える。清和天皇は『伊勢物語』六十五段にも
この帝は顔かたちよくおはしまして

と記されている。なお、永井和子氏訳注『伊勢物語』（対訳日本古典新書『伊勢物語』昭和五十三年、創英社。百二十頁）所引『三代実録』には、この部分の記述を「風姿甚美」としている。

『三代実録』には他にも

美姿儀、風神警良。（藤原良仁）

風容閑雅、举止詳審。（藤原良綱）

率性俊雅、風尚不恒。（源信）

容儀可觀、風望清美。（藤原良近）

などの記述が見られる。女の例では、仁明天皇女御の藤原貞子について

風容甚美、婉順天至。

と記し、僧侶の例としては、円仁について

風貌溫雅。

という記述が見える。

歴史書以外では、仏教説話に「風姿」の語が使われている例がある。中国梁代の僧、僧祐（四四五〜五一八）の編纂になる『釈迦譜』は、釈迦の一代記であるが、第五・三十一「阿育王造八萬四千塔記」、『大正新脩大藏經』第五十、八十一頁）には阿育王の王子である鳩那羅太子の説話を載せる。

法益経云、王有太子。名達摩跋檀那。齐

言法益。是起八萬四千塔日所生也。眼可

愛如。似鳩那羅鳥眼。即以為名焉。風姿

明雅、有文武称。善彈一弦琴。

王子は目が美しく、鳩那羅鳥という鳥の目に似ていたので、それにちなんで鳩那羅太子と名付けられた。姿は優雅で文武に優れ、また一弦琴の演奏も得意であった。ここに見ら

れる「風姿明雅」という表現は、歴史書の記述の型を踏襲している。

鳩那羅太子（拘那羅太子とも表記）の説話は、中国の『大唐西域記』『法苑珠林』を始め、『今昔物語集』巻四・四『三国伝記』巻七・四等の諸書に見える著名な話である。この説話は、能の「弱法師」や説経節の「しんとく丸」、浄瑠璃の「摂州合邦辻」のもとになった俊徳丸説話の源流として知られる。

太子の美しさに愛欲の心を起こした継母の後が、太子に拒絶されたことを逆恨みし、太子を陥れる計略を画策する。太子は継母にだまされて自らの眼を抉り出して盲目となり流浪する。偶然にも城に戻って来た太子が琴を弾くと、太子であることが分かり父王と再会する。諸書により話の展開には小異があるが、いずれも純真高潔な太子の人柄が描かれている。ことに琴の演奏をきっかけに父子が再開する場面は感動的である。

世阿弥は主に女の役柄に対して「風姿」の語を用いているが、この言葉は本来、僧俗男女を問わず広く使われるものであった。「風姿」という言葉は、いずれも人物の姿が美しく、かつその人物の内面も優れている場合に使用されることが多い。今回検討した男の「風姿」の用例は、世阿弥能楽論と直接関係があるわけではないが、「風姿」の用例を幅広く見ることによって、世阿弥の使用法の特徴も見えてくるのではないか。今後も用例の発見・収集に努めたい。

（國學院大學教授）